

## 巻頭言

## 真 実

NPO 法人 防災・危機管理教育協会

理事長 平野 敏 右



話をしている、「今の話は、嘘である」と言われたら、話をした人間は、特に学者であれば、当然落ち込む。

大災害の時にこんなことを記述してよいかどうか分からないが、今回の福島第一原発で水素爆発が連続して起こり、約 30 年前に、原発での水素爆発の重要性を何回かの機会に話し、無視され続けてきたことが実は正しかったということが証明された。ことのいきさつは、以下のとおりである。アメリカのスリーマイル島での原発事故の後始末で、事故のあった原発の生産にあたった、カナダの原子力公社で、事故時の火炎伝ばを測定したいという要望があり、日本で伝ば火炎の測定を手掛けていた筆者に声がかかり、ホワイトシェル原子力研究所へ出かけた。そこで、スリーマイル島の事故で、水素爆発が起こり、その現象解明と、対策の会議が開催され、その会議に筆者も参加した。

スリーマイル島の事故で、水素爆発が起こったことは、事故報告書以下、いろいろな機会に公表されていたが、カナダからの帰国後、関係者への講演で、話をさせてもらった。当時の原発の安全対策として開催された、原発の安全に関する国際シンポジウムにおける発表論文の表題からもわかるように、水素爆発の防止は、国際的には最優先課題であった。しかし、日本国内の関係者たちは、私の報告を無視し、水素爆発対策をするどころか、私が話したことに対する非難さえあった。10 年ほど前に、そのことをある科学雑誌に書いた時には、記事の差し止め騒ぎさえあった。それが今回は、水素爆発を認め、対策をするという。

私は、学者として、言うことの信憑性を疑われるという屈辱に、30 年間も耐えてきた。水素爆発の威力は、発生すれば、一平方メートル当たり数十トンの力がかかるという、強烈なものである。スリーマイル島の事故時にも、一平方メートル当たり 20 トン以上かかったということが、事故時の圧力計測の結果からわかる。カナダの原子力公社があわてた理由もよく理解できる。

日本では、水素爆発は起こらないという信念のもとに、なにも行ってこなかった。発言者に屈辱を与え、黙らそうとしてきたとしか思えない。今後も心配なことである。

ところで、水素を扱う場合、水素爆発を防止するのは当たり前で、水素が漏えいして爆発すれば、全ての水素を取り扱う技術に停滞が起こることは、目に見えている。最大の二次災害といえる。貯留中の水素が漏洩して爆発しても、原発の水素爆発ほどの威力はないはずではあるけれど、注意するに越したことはない。

筆者は、自分の年齢からみて、原発の水素爆発に関して、耐えてきたような長期間の忍耐ができるとは思えないが、できるだけ水素爆発を起こして困る人が出ないように努力するつもりである。

もっとも、心配なこともある。東京大学で安全確保の講義をしていた当時、水素をとり扱う研究室の学生が、教員の指令であるということであったが、そろって講義をさぼったことがある。事故の前兆であるような気がしている。事故を恐れないというと、勇気があるようではあるが、想定していなければ、事故処理さえ満足にできないことは多くの事例が示している。

水素を取り扱っている人々は、爆発の現場を見たことがない、あるいは爆発災害の恐ろしさに無知な人々が大多数であると思われるが、これからでも遅くはないので、勉強をして、災害に備えて欲しい。安全対策を行っていない技術は、脆弱である。